



学校だより

第54号 平成23年9月29日

キャリア教育（7）

副校長 渡邊昭宏

「協力」というのは、社会で生きていくうえで欠かせない生きる力です。しかしこれを「共同作業」とか「協調性」といったイメージだけでとらえてしまうと、特に小学部や重度重複そして重心の児童生徒の保護者にとっては縁遠い存在になってしまいます。

確かに、就職とか就労支援という立場で言えば、「力を合わせて一緒に仕事をする」ことを意味しますが、その準備教育として「友達と力を合わせて重いものを運べるようにする」といった課題だけをキャリア教育として訓練するのはいささか狭い考え方です。

「金沢のキャリア教育」では、「協力」の原点をさぐって、一人ひとりの発達課題に応じた手立てをスモールステップで考えて支援していくことにします。

「協力」とは、まず「保護者と一緒に何かをする」ことから始まります。ここでも「一緒に」という言葉を、フィフティ・フィフティつまり「同じだけの力をお互いに出し合っ」というイメージでとらえていると先に進めません。こんな風に考えてみませんか。「お子さん：保護者」の力の出し方が、「0：100」から「1：99」になったとき、「協力してくれた」と言えるのではないかと。ちょっとでも力を貸してくれたら褒めてあげましょう。力の量ではなく、他人とどう関わることがわかった瞬間だからです。ひとりのできるようにしていくことも大切ですが、他人と一緒にできることも大切なのです。

身辺自立の初歩として「協力動作」というステップがあります。たとえば保護者がお子さんの服や靴を脱がせるとき、お子さん自身が、脱がせやすいようにじっとしてくれたり、バンザイしてくれたり、一瞬だけ片足を宙に浮かそうとしてくれる「あれ」です。これって立派に「保護者と力を合わせて服を脱ぐ」という共同作業をしているといえませんか。キャリア教育とは、新たに何か変わったことをするのではなく、私たちのものの見方・とらえ方をちょっとだけ変えてみることだと思います。

「協力」は、キャリア教育の観点でいえば「人間関係形成能力」の中核をなすものです。なぜなら、相手の行動やペースに合わせられるということは「相手を思いやることができる」「相手の立場を考えることができる」初めの一歩だからです。同時に相手がやりやすいように心や体を調整する（意思決定能力）、次にされることを予測して力を入れたり抜いたりする（将来設計能力）、言葉をかけられたり絵カードを見せられたらそれに応じる（情報活用能力）もバランスよく育まれていくのです。

筆に保護者や担任が手を添えても嫌がらず一緒に絵を描く、一緒にドアをあけるといった経験（学習）が、やがて友達と一緒に大玉を押ししたり、ボールを運んだりというよくある運動会の種目にも結びついていきます。小さな経験を有意義に積み重ねて、今をそして将来を「生きる力」にしていきたいと思います。（次回につづく）